

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32511

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2016

課題番号：23730541

研究課題名(和文) 児童養護施設における家庭的支援と自立についての再検討

研究課題名(英文) Consideration about socialwork and care for autonomy of children in the children's home

研究代表者

田谷 幸子 (TAYA, Sachiko)

帝京平成大学・現代ライフ学部・講師

研究者番号：30440001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、児童養護施設経験者が「今はやれている」あるいは「やっていけない」思いを抱いて主体的に自分の人生を生きていくための支援として、児童養護施設における職員のかかわりが与えた影響を検討することである。分析の結果、児童養護施設経験者の語り及び人生曲線から、「施設入所理由の理解」、「担当職員の変更」、「退所時の支援」時の職員のかかわりが重要であることがわかった。また、人生曲線の揺らぎを支えるものとして、「職員との愛着形成」、「施設との関係」があることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to consider the influence to staff's support for the living in a children's home, as the support to the thought that persons with experience of the institution "can do" or "can manage". The analysis gives the following results. It is important to staff's concerning at "understanding of an entering reason of the institution", "change in the charge staff" and "the support when leave" by a narrative part and a life curve of persons with experience of the institution. In addition, I found out that there are "attachment relations with a charge staff" and "good relation with the institution and staffs" as support with a shake of a life curved line.

研究分野：児童福祉

キーワード：児童養護施設 自立 退所者支援 主体的自立 職員のかかわり 人生曲線

## 1. 研究開始当初の背景

児童養護施設(以下、施設)は、親の死亡や行方不明、親からの虐待などの理由によって適切な養育環境にない子どもたちを入所させ、自立支援を目的として日常生活支援をはじめとして様々な支援を展開している。しかし、施設経験者の中には退所後、生活困難に陥り、自立が難しいケースもある。施設経験者の生活状況に関する先行研究においては彼らの退所後の生活の実態把握がなされ、彼らの家族背景、低学歴による不安定就労、希薄な人間関係などが問題視され、その背景に自己肯定観の低さが指摘されている。このような問題を解決するための支援を検討する必要があった。

## 2. 研究の目的

施設経験者の生活困難は、施設退所後の生活困難は突然生じるものではない。施設入所理由や子どもの発達課題、子ども自身の主体性や支援状況等様々な要因が重なり合って生じてくるものであり、施設入所中の支援により、施設退所後の生活を安定させていく可能性がある。施設経験者が主体的に生きていくためには、関係性の構築や支えられることの実感を施設のケアでなされることは重要であると考え、施設経験者が主体的に生きていくために支援を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象者

首都圏の施設(以下、A施設)の協力を得て質問紙調査とヒアリング調査を実施した。質問紙調査の項目で「自立している」、「充実した生活を送っている」に「とても思う」、「思う」にチェックをしたA施設経験者のうち、ヒアリング調査への協力を受諾したA施設経験者12名(以下、この12名をA施設経験者と呼ぶ)にヒアリング調査を実施した。ヒ

アリング調査は質問紙調査を元に半構造か面接を実施し、ヒアリング時間は平均2時間であった。A施設経験者の許可を取りICレコーダーで録音をし、文書データ化した。2014年8月~2015年3月、2016年10月~2017年3月である。

### (2) ヒアリング調査対象者の状況

ヒアリング調査協力者は、男性5名、女性7名、インタビュー当時の年齢は30代後半4名、30代前半5名、20代後半1名、20代前半2名である。入所時の年齢は平均4.5歳(2歳~11歳)、退所時の年齢は平均17.4歳(10歳~20歳)である。施設入所理由は、離婚3名、虐待2名、経済2名、養育困難2名、病気2名、死亡・拘禁1名である。

(3) 倫理的配慮として、本調査は日本社会福祉学会研究倫理指針及び帝京平成大学倫理規定に基づき、帝京平成大学倫理審査委員会の審査を受け調査実施の承認を経て実施している。調査対象者には、質問紙調査実施時及びヒアリング調査実施時に調査目的や調査データ使用、情報管理について口頭及び紙面で説明し、同意を得た上で同意書に署名を得ている。

## 4. 研究成果

(1) 質問紙調査結果では、在所年数においてA施設は平均12年となっており、厚生労働省雇用均等・児童家庭局(平成21年7月)の報告にある在所年数4.6年と比較すると長期の傾向がある。その影響もあり、最終学歴は高校卒業のものが最も多く、専門学校や短大への進学者もいる。施設での生活や職員との関係においてはおおむね良好な結果が得られ、職員の意識的かわりを理解し実感していることが分かった。しかし、自分から「なんでも職員に話せた」、「考えや思いを伝えることができた」に関しては相対的に低く、自分を伝えることについては困難がある。退所後の相談相手としては、「施設」「職員」「同

じ施設の子ども」が最も多く挙げられており、施設における関係性が退所後の生活を支えていることが分かった。しかし、「施設にいたことを話すことは難しいと感じるA施設経験者もあり、施設に支えられながらも周りにそのことを開示できない様子が分かった。

(2) 施設でのケアを検討するにあたり、人生曲線を手掛かりとしてヒアリング調査を実施し、A施設経験者の思いと支援の分析を行った結果、「施設入所理由の理解」、「担当者の変更」、「退所時の支援」が施設生活において揺らぎが生じやすく、それらを支えるものとして、「職員との愛着形成」、「施設との関係」があった。

「施設入所理由の理解」は、子どもが施設入所への疑問を覚え自ら質問をした時期、小学校中・高学年で行われている。子どもの疑問に応え説明していくことが、子どもの施設生活の受け入れにつながっている。「施設入所理由の理解」を受け入れることは、子どもが施設生活を主体的にとらえるきっかけとなり、「やれている」思いを維持する。「職員との愛着関係」が良好であることが「施設入所理由の理解」での子どもの混乱を最小限に抑え、「やれている」思いを回復することにつながっていた。疑問に答えていないと子どもが感じたときには、「職員との愛着関係」の悪化をもたらしている。一方で、「施設入所理由の理解」を受け入れていても、「施設で生活している」事実を他者に伝えることには抵抗があり、施設での生活を受け入れざるを得なかった様子があった。

「担当職員の変更」は、子どもにとって「職員との愛着関係」の断絶を意味し、子どもに揺らぎを生じさせるものであり、子どもの人生の危機を意味する。複数回にわたり「担当職員の変更」があると、「職員との愛着関係」の形成はより難しくなっていく。施設入所時の年齢が上がっていくにつれ、「職員との愛

着関係」に変化が見られる。A施設経験者の場合、5歳が分かれ目となっていた。低年齢では職員を「親」とみる「職員との愛着関係」が形成されていたが、それ以降は「生活を助けてくれる人」というイメージに変化している。これは親の存在の認識や担当制といえども集団で子どもが生活することによる職員との関係が影響していた

「退所時の支援」は、子どもの進路希望に沿った支援に意味がある。特に職員や施設から全面的支援が子どもの安定を支えていた。退所時前後には、進路の変更、親との関係の見直しなど、急激あるいは緊急の外的変化が生じやすい状況にある。子どもが急激あるいは緊急の変化に揺さぶられるため、「職員との愛着関係」や「施設との関係」が揺らぎを支えるものとなる。

(3) 退所後のケアにおいては、人生の揺らぎは施設での生活よりも大きいものがあり、退所後の生活は先行研究同様に困難があることがうかがえた。一方、「施設で生活する」事実がなくなったことにより、自分の人生と向き合う状況が生じている。このことは、彼らの思いとしてプラスとなっている。退所後の揺らぎを支えるものとして、「施設からの定期的な連絡」と「職員との交流」、「A施設経験者の施設訪問」、「A施設経験者同士の交流」があり、施設職員との対話により施設や施設でのくらしを振り返り、解釈を変更しながら「施設で育った自分」を受け入れていく変容が見られた。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計6件)

田谷幸子、担当制をしる児童養護施設内のくらしに対して職員のかかわりが与えた影響 施設経験者が語る「人生曲線」を手がかりにして-、子どもの権利条約総合研究所大会、2017年5月21日、早稲田大学(東京都

新宿区)

田谷幸子、児童養護施設経験者の施設生活の肯定観形成に関する一考察(2) 児童養護施設経験者の聞き取り調査から-、日本社会福祉学会、2016年9月10日、佛教大学(京都府京都市)

田谷幸子、児童養護施設経験者の施設生活の肯定観形成に関する一考察 児童養護施設経験者の聞き取り調査から-、東洋大学社会福祉学会、2015年8月2日、東洋大学(東京都文京区)

田谷幸子、社会的養護における施設ケアの効果と課題-児童養護施設退所者の聞き取りを通して-、日本児童養護実践学会、2015年2月28日、昭和女子大学(東京都世田谷区)

田谷幸子、地域における学習支援のありかたについて-キャリア支援を視野に入れた学習支援の効果と課題-、日本社会福祉学会、2014年11月30日、早稲田大学(東京都新宿区)

田谷幸子、10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する研究-児童福祉施設への調査について-、日本社会福祉学会、2011年10月9日、淑徳大学(千葉県千葉市)

## 6. 研究組織

研究代表者 田谷 幸子 (TAYA Sachiko)

帝京平成大学・現代ライフ学部・講師

研究者番号：30440001